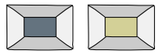
団地に浮遊するエレメント　ー「知」と「恕」の交換によるコミュニティーの広がりー

平坦かつ単調な立面、天井の低さと窮屈さを感じるエントランス・階段室

色彩計画



階段室の中と外観の窪んでいる部分を塗装する。
［寒色ー後退色］［暖色ー進出色］という効果を利用し、くぼみ部分を寒色で塗装することで、奥行きを感じられる階段室と凹凸のはっきりした立面を現す。

エントランス

エントランスの窮屈さに対して、突き出した屋根をかけ、住人が溜まれる場所を作る。イベントの情報を共有する掲示板としても活用する。

Concept

”知と物の集積・パッチワーク”

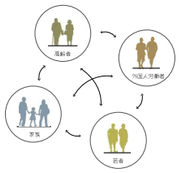
”知”の交換を行うワークショップを開催することで、
世代を越えた様々な”人”が集まり、
団地内から運ばれてくる”物”が交流の場を作る。
目に見えない知識や目に見える人、建材などの集積のパッチワークが
１つの団地コミュニティとなる。
コミュニティ形成の要となる”物”のパッチワークで拠点の部屋が形作られる。

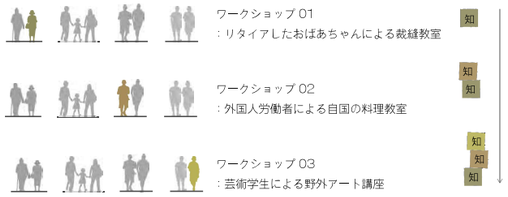
Program

”幾つもの主体が織りなすコミュニティ”

”人”：住まい手　　”知”：専門分野、趣味、生活知

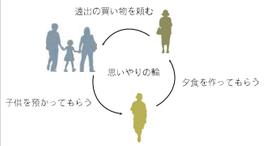
月一回のワークショップを毎回異なる住人が開催する。
自分の得意を生かせる場所とし、お互いの知識を共有・集積する。
高齢者は生涯学習の機会が得られ、学生にとっては研究のフィールドワークとなる。





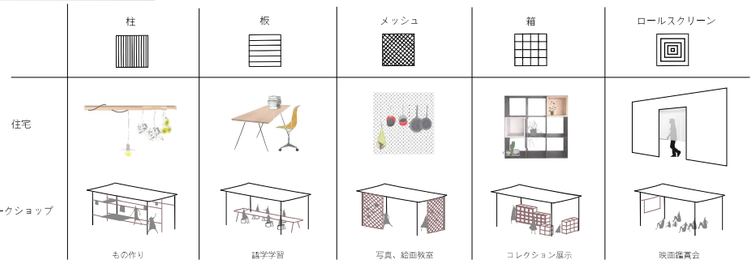
”地域通貨による思いやりの交換”

清瀬の地域通過「ピース」を団地内でも取り入れ、
ワークショップや日常の中で使用する。
ローカル経済をまわし、助け合いの中で生まれる
程よい繋がりのあるコミュニティを形成する。



”団地内を行き交う建材”

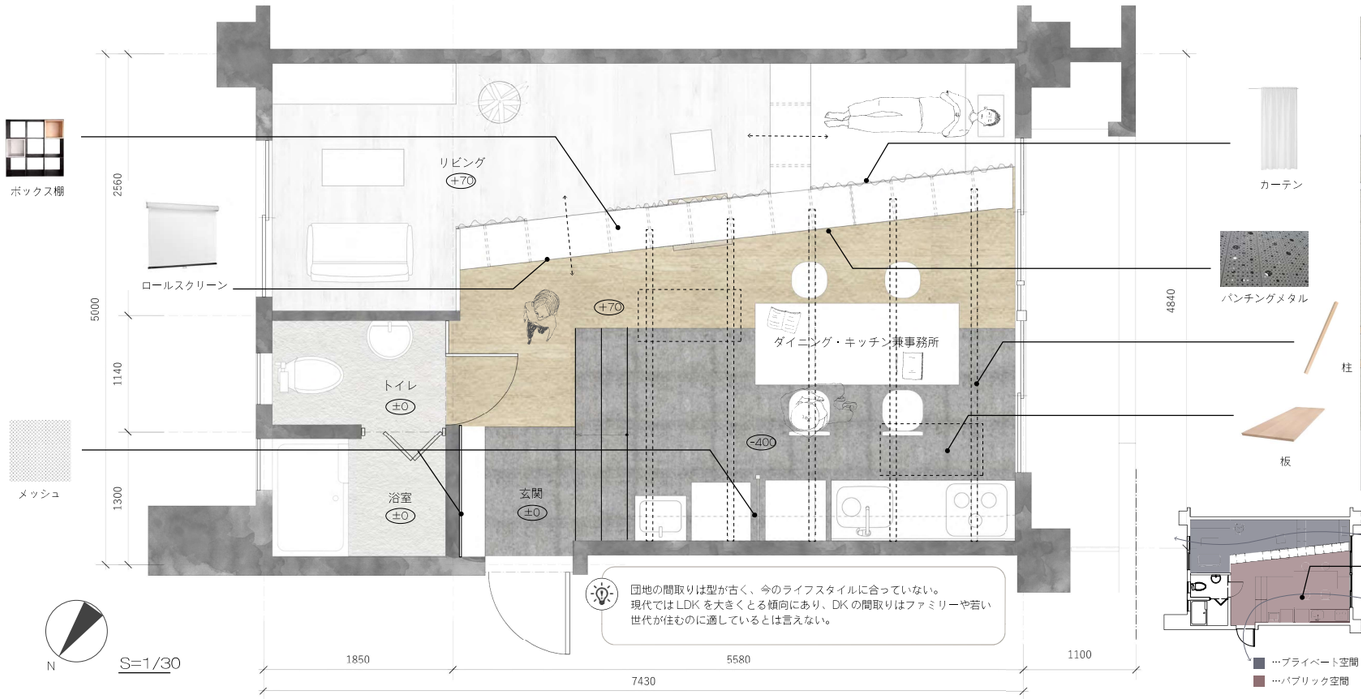
”物”：エレメント
汎用性のある建材が家の中ではインテリアを彩り、住戸の外に出るとワークショップの一部となる。



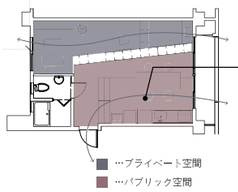
”コミュニティとアクティビティの見える化”

豊かな屋外空間が団地の特徴でもあるが、
住棟前の芝生は立ち入れないスペースとなっている。
住民の暮らしやコミュニティが表に出てこないため、
閉鎖的な印象を受ける。

団地内に散在する部屋［拠点］と芝に配置されるワークショップのための小屋。
商店街を中心に２エリアに分け、それぞれ１箇所の小屋に各拠点からエレメントが集められ、ワークショップが行われる。
開催される拠点は月ごとにローテーションされ移動していく。年に一回、２エリア合同で開催する。



団地の間取りは型が古く、今のライフスタイルに合っていない。
現代ではLDKを大きくとる傾向にあり、DKの間取りはファミリーや若い世代が住むのに適しているとは言えない。



普段は学生基地として、
団地に住む若い世代が集う場所。
ワークショップ時には多世代が
交流する場として解放する。

プライベート空間から土間の方向を見る